



紹介者

志済 聡子

中外製薬
執行役員

山本 麻理

FRONTEO
取締役



“万物は言によって成る”AIで言葉を解析

鳴き声や体の動きでコミュニケーションをとる動物は多いが、複雑な意味を言葉で伝え合うのは人間だけだ。一般的に自然言語解析を行おうとすると、辞書を作ったり、意味が似たような言葉を名寄せしたり、非構造的な文章を構造化したり、音声認識の誤変換に修正を加えたり…といったプロセスから始める。

しかし、普段の会話で文法を気にしながら話すことはほとんどない。人(=専門家)は、相手が特に意識せずに使っている言葉の中から「何か」を紐解く。例えば、認知症の専門医は患者さんの生活の様子やさまざまな検査に加え、会話の中にある言葉の特徴や変化を捉えることで診断を行うという。犯罪捜査官や弁護士は溢れるドキュメントから怪しいと思う文書を見つけ出す。カウンセラーや人事の専門家は面談相手の「大丈夫です」という言葉の裏に隠れる放っておけない「大丈夫です」を察知する。

当社が持つ二つの言語解析AIエンジンKIBITとConcept Encoderは専門家の知見や暗黙知をそのまま学習する。対象となるデータも修正や加工は基本的に行わない。言葉の多様性や揺らぎもそのまま使う。少ない学習データで専門家の判断を再現することを日々行っている。

話は変わるが2月に12歳の息子と2人で静かな京都を訪れた。目的は龍安寺方丈庭園。北山の地にそびえる衣笠山のたもとに位置する龍安寺が古刹といわれている由縁は、室町時代より続くその由緒のみならず、方丈に備わる枯山水庭園によるところが大きい。水を使わずに自然の風景を表現する庭。長方形の敷地に白砂を敷き詰めて石を配しただけの非常にシンプルな庭をただただ眺める。限られた空間の中で、限られた素材だけを使って広大な宇宙を表現しているという。

日本人が開発したKIBIT、Concept Encoderと似たような発想だ。とかくAIというと世界中から集めたビッグデータを解析するイメージがあるが、そうではない。そこにあるありのままのデータを活用して事象を捉える。そこには人間の^{えいち}叡智や暗黙知が含まれている。

この日本らしいアプローチに誇りを感じる。AIと共に事業もさらに発展させたい。

▶▶ 次回リレートーク

鈴木 亨

日本能率協会コンサルティング
取締役社長